

アトリエ 琉游舎 だより 44号

2019年1月16日発行

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

霜柱 款冬華 寒仕込

(しもばしら ふきのはなさく かんじこみ)

- このひと月が一年で一番寒い季節です。霜柱の力はすさまじく昨年は琉游舎のコンクリートのスロープを3センチほど持ち上げてしまいました。今年はまだ柱と呼べるような立派な霜柱が立っていないので、穏やかな冬なのかもしれません。
- そろそろ露の臺が顔を出し始めるころです。1月20日頃を款冬華（ふきのはなさく）候と言います。香りが強くほろ苦い生命力に溢れた早春の味。他の季節に比べ無味無臭無色の季節に見られがちな冬も、地面の下は春に向かって確実に蠢いています。
- 寒の時期に仕込んだ酒や味噌などは「寒仕込」と呼ばれ重宝がられています。手がちぎれんばかりの冷たい「寒の水」は雑菌も繁殖しづらく、発酵も穏やかなので味に深みが出るからなのだそうです。
- 冬の寒さは、生命力を養い高める仕込み期間のようです。受験もスポーツも明日の何かの結果も、仕込みで善し悪しが決まってしまうとすれば「真冬、悔り難し」ですね。
- 「霜柱 款冬華 寒仕込」季語だらけの俳句もどきになってしまいましたが、霜柱の力強さと、ふきのとうの豊かな香り、寒仕込の深い味わい、そんな琉游舎にあしたこそはなろうと今日もオープンしています。お待ちしております。

木 金 土 日

1・2月のスケジュール

月	火	水	木	金	土	日
			17 映画会 13:30	18	19	20
21	22 読書会 13:30	23	24 映画会 13:30	25 居酒屋の会 16時～	26	27
28	29	30	31 映画会 13:30	2月1日	2	3 写経会 13時半
4	5	6	7 映画会 13:30	8	9 詩話会 13時半から	10
11	12 読書会 13:30	13	14 映画会 13:30	15	16	17
18	19	20	21 映画会 13:30	22	23	24

読書会

1月22日
2月12日
13時半から

写経会

2月3日(日)
13時半から

詩話会

2月9日(土)
13時半から

映画会

毎週木曜日
13時半から

「海底撈月」：（かいていにつきをすくう）、隔靴搔痒と同じ意味です。痒くてたまらないことがあると靴の上からでも足を搔きます。少しは痒さが和らぐ気になるでしょう。海面に映る月を手にくすくおうとしても無理な相談ですが、でも手の中の水に月を映し出すことはできます。手の中の月はきれいですね。ちょっとだけ気持ちと和みます。ありのままに観ると言うことを心がけていると、見たくないものまでが見えてしまうことが良くあります。そんなときは「狂言綺語」のものわりの良い僧侶から、「海底に月を撈う」の隠居の小言幸兵衛に変身します。

ダメ出し

冬の掃除はつらいものです。とは言っても掃除用具が箒と雑巾から掃除機とモップに変わったことで、小学校時代の教室掃除に比べれば随分と楽になりました。琉游舎も毎週木曜の朝は二時間ほどかけて内と外の掃除です。床はモップで水拭きですがその他は雑巾で拭かなければならないので、手が凍り付くような冷たさ。残り水で外のウッドデッキをブラシでこすっていたら、たちまちシャーベット状になってしまい、危うく滑って転倒するところでした。

先日テレビで目を疑うような光景を見てしまいました。オリンピック・パラリンピックボランティア研修のニュースの中に、足で雑巾を踏んで体育館の床を拭く人たちが映し出され、その掃除のやり方に思わずダメ出しをしそうになりました。雑巾は手にもって拭く物、足で踏んづけて拭く物ではありません。と思っていたのですが、研修の中で全員がその様な床の拭き方をしていたので、なんらかの事情があるのだと自分を無理に納得させました。私も小学校時代そんな拭き方をしていたことを思い出します。先生のいないときはたまに足雑巾していたのです。嫌々掃除をしていたからなのは確かで、いずれにしても見つかれば間違いない怒られていたはず。お行儀の問題なのか、足で踏む行為を忌避する精神の問題なのか、ダメなことを恥とし恐れ避ける感情は理屈ではないはず。私はたまに扉を足で開け閉めしてしまうことがあります。見つかる。「便利な足ね」と妻には即刻ダメ出しされます。足使いに対する共有の倫理やタブーがあればこそそのダメ出しは素直に受け入れ改善します。だから今度は誰も見てないところで便利な足を使います。

美しい日本語

テレビを見ているとこぼすように気がなることがあります。いわゆる「ら抜き言葉」というものです。インタビュアーを受けた人から抜き言葉を使うと字幕スパーでそれが必ず訂正されるのです。たとえば「毎朝六時には起きれますよ」という音声に「毎朝六時には起きられますよ」というスパーがつくということ。私が見ている限り老若男女有名人名まで、誰かまわらずインタビュアーの類いでスパーが入る場合は必ず訂正されています。私自身抜き言葉は小学生の頃から文法的に誤った使い方だといわれ続けて五十年以上経っていますが、ら抜き言葉を使っていないという確信は全くありませんし、ましてや人が使ったら抜き言葉を訂正するなどという失礼なことは一回もしたことがありません。

言葉は時代とともに変わっていくものです。特に仏教用語に関しては正反対の意味になることを何度か「狂言綺語」で、言葉の変遷理由と合わせて述べてきました。テレビが日本語の番人を持って任じているとしたら「ら抜き言葉」の訂正よりもっと正すことがあのような気がするのですが、どうなのでしょう。

現在「ら抜き言葉」を完全に使わずに話せる人はごく少数のような気がします。美しい日本語に固執する一部の人がいると耳障りなのでしょうが、五十年以上言い続けても正されないなら、それはもう美しいとは言えなくても正しい日本語ではないでしょうか。

美しい日本語と美しい日本。その様な時がいつの時代にあったのか分かりませんが、そんな時代はなかったのにそれをさもあったかのように言うことの方が「ビミョウ」で「チョーやば」のような気がします。